

文化の十字路

——アレクシー文学『リザベーション・ブルース』に見る インディアン——

足 立 匡 行

Abstract

Indian Cultures on Crossroad
—“Being an Indian” in Alexie’s *Reservation Blues*—

Masayuki Adachi

Using Sherman Alexie’s *Reservation Blues* as an example, this paper attempts to show how Indian people in contemporary American society are biologically and culturally “mixed” with non-Indians. Despite this hybridization, Indians have not lost their identities. One important factor that contributes to Indian identity is memories created and handed down from generation to generation through their oral tradition. Those memories (most often very negative ones) continue to exist in the minds of the people. As a result, this connection over time becomes a crucial element to “being an Indian.”

はじめに——インディアンと DNA¹——

インディアンとは一体「誰」を指す言葉なのだろうか。現在カリフォルニア州からコネチカット州に至る全米で自分がインディアンであることを証明するために DNA 検査を受ける人々が増加しているという。その一人オクラホマ州タラクア (Tahlequah) 在住で幼少時代をチェロキー (Cherokee) の人々とともに暮らしたマリリン・ヴァン氏 (Marilyn Vann) は、約 200 年以上遡

るチェロキー・インディアンとしてのルーツを持っている。しかしチェロキー・ネーションは「彼女の父親は 1907 年の登録名簿にチェロキーとしてではなくフリードマン (Freedmen) として記載されている」という理由から、ヴァン氏の部族へのメンバーシップ承認を拒否している。²

連邦政府に認可されている 562 部族のメンバーシップに関する規則は統一されたものではなく、両親のどちらかが部族に属していればメンバーとして認める部族もあれば、父系を通してのみメンバーシップを認める場合もある。時には 4, 5 世代内に「純血」のインディアンである人物との関係を証明することが要求されることもあるが、ほとんどの部族では、たとえ少量でもインディアンの血が流れていることが証明できれば、肌や髪、目の色に関係なくメンバーシップを寄与することが多い。

インディアンの人口は 1995 年に 140 万人だったが、2001 年には 180 万人となっている。この急激な人口増加は、インディアンになることで得ることのできる金銭的恩恵に与ろうとする人々が数多くいるためである（この恩恵は部族によって異なるが、医療費の免除、奨学金等を含む）。この変化に伴い、各部族はメンバーシップを与える規則をより厳格なものとするようになってきている。例えばアイオワ州のメスクワキ族 (Mesquakie) は、カジノでの利益を目的としてインディアンになろうとする人々を選別するために DNA 検査を義務化している。

しかし DNA 検査は必ずしも正確なものではない。検査の問題点は 4 人の祖父母から同等の DNA 分配が行われないという点にある。35% を最高値とする遺伝子は母方の祖父から受け継がれ、15% 程度のみが父方の祖父から継承されると言われる。さらに世代を遡るほどインディアンである祖先との結びつきを証明するのは困難になってくる。たとえインディアンの遺伝子を持っていることが証明されたとしても、それを特定の部族に結びつけることはできない。つまり DNA のみからインディアンを定義することは不可能だと言えるだろう。生物学的見地からインディアンを定義するとかなりの混血が進んでいることは明らかな事実だ。この混血と同様にインディアン文化も現在に至るまでには、他の文化と絶えず混ざり合い築き上げられているこ

とは推測できるだろう。例えば、オセイジ・インディアン (Osage) の伝統儀式イロンシカ (I'n-Lon-Schka) で歌われる歌の一部は近隣の部族から「買い取った」ものである。しかし時間をかけて彼らは「外から伝えられたもの」を自分の文化に位置づけ、意味付けをして、自分たちの文化と一部としたのである。

この「混血」や「文化の融合」は、1995 年に出版されたシャーマン・アレクシー (Sherman Alexie) の長編小説『リザベーション・ブルース』(*Reservation Blues*) に読み取ることができる。アレクシーは、この小説でステレオタイプとして一定の型にはめられたインディアンではなく、アメリカ社会を生きる等身大に近いインディアンたちの姿を描いている。そこにはリザベーションという世界での貧困、自殺、飲酒といった否定的な側面のみを描くのではなく、苦悩しながらもユーモアを持って困難を乗り越えていくインディアン像が見て取れる。本論ではアレクシーの『リザベーション・ブルース』における描写を通して、インディアンたちがいかに「作られたイメージ」から脱却し、現代社会との融合を受け入れつつも、過去の記憶を保持することで、独自の文化を継承し、現在を生きているのかを検証していく。

2. 混じり合う文化

『リザベーション・ブルース』は 1992 年に伝説の黒人ギターリスト、ロバート・ジョンソン (Robert Johnson) がワシントン州スポーカン [足立 1]・リザベーション (Spokane Reservation) の十字路にやってくるところから話しが始まる。ジョンソンは「ハンサムな白人のジェントルマン」(Alexie 1998:324) から逃れ「自由」になるために、そして特別な力を持った魔法のギターを手放すために、スポーカン族の伝説的な人物ビック・ママ (Big Mom) に助けを求め、最後にはリザベーションに残ることを選択する。「1881 年にスポーカン族の保留地が作られてから 111 年のあいだ、インディアンであろうとなかろうと、偶然そこにたどり着く者はだれひとりなかった」(Alexie 1998:14) というアレクシーの言葉からは、白人から逃れた黒人奴隷たちがインディアンの村に逃げ込み、時にはそこで部族の一員として受け入れられた

という過去の歴史と重なる部分もあるだろう。

『リザベーション・ブルース』では、黒人のジョンスンとビック・ママや他のインディアンたちとの交流以外にも様々な場面で「混ざり合う文化の様相」を読み取ることができる。例えば、物語の主人公たちが形成するバンド、コヨーテ・スプリングズ (Coyote Springs) は、ブルースやロックンロールなど多彩な音楽を取り入れている。インディアンの楽器は太鼓だけではないし、いつも「アワワワワー」と叫びながら歌うわけでもないのだ。ニューエイジにかぶれ古代インディアンの知恵を期待して水晶を持ってコヨーテ・スプリングズの演奏を聞きに集まった白人たちは、彼らの期待に反してセックス・ピストルズのカバーを何曲も聞かされることになるのである (Alexie 1998:58)。

現代に融合して生きるインディアン・バンド「コヨーテ・スプリングズ」は、スポーカン族の火おこしトマス (Thomas Builds-the-Fire)、ヴィクター・ジョセフ (Victor Joseph)、ジュニア・ポラトキン (Junior Polatkin) の3人と、フラットヘッド族の姉妹チェス (Chess) とチェッカーズ (Checkers) の2人を主たるメンバーとして構成されていた。さらに一時期ではあったが、シアトルでニューエイジの書店を営む白人のベティ (Betty) とヴェロニカ (Veronica) もバックコーラスとして参加していた。スポーカン族の一部からは、ロックは悪魔の音楽であるという意見がきかれ、バンドに対しては嫌悪感が示された。部族議会議長の歩くデイヴィッド (David WalkAlong) も「スポーカン・インディアン・バンドを名乗っている以上、別の部族、ましてや白人たちがメンバーに加わるのはいかななものか」という不満を述べていた (Alexie 1998:219-220)。しかし、このバンドの構成員こそが、アレクシーの描く「インディアン」を表象していると考えられる。

グロリア・バード (Gloria Bird 1995) は、アレクシーの描くインディアンは、スポーカン文化の独自性に関する描写が欠如し異なる部族文化が入り混じった状態で描かれている点を批判しているが、アレクシーはスポーカン族のみの文化ではない、より広義での「汎インディアン」を意識的に描いているのではないか。だからこそコヨーテスプリングズの若者たちは自分たちへ

の批判の声を殆ど気にすることはなかったと言えるだろう。

... インディアンの世界は狭い。パウワウ一つ分くらい離れたところで踊っている。互いに未来の恋人であり、友人であり、親戚であり、地平線のすぐ向こうにいる。いつも見える範囲の少しだけ向こうにいるのだ。それほどお互いを近くに感じている。そしていつも体を寄せ合い、嵐に目を閉じている。(Alexie 1998:190)

コヨーテ・スプリングズが代表するこの物語のインディアンたちは、パウワウに異なる部族が集まるように、部族を超えた「汎インディアン」として表現されている。つまりアレクシーは『リザベーション・ブルース』において1部族としてのインディアンではなく、部族を超え、時には「人種」を超えた、異種同士の混成の中に存在するインディアンを描きたかったように思える。

部族に囚われず人々が交じり合うとともに、スポーカンの宗教もキリスト教との共存が成り立っている。スポーカン・リザベーションのアーノルド神父が初めてのミサを行った時、カトリックの最長年者からドリームキャッチャーを贈られ、神父はそのこみいった糸とビーズの細工に、ひどく感銘を受けた。そしてドリームキャッチャーのビーズが、実はロザリオの玉だと気づいたときには声をあげて笑った (Alexie 1998:308)。ここではキリスト教が伝統的なインディアンのドリームキャッチャーの一部となりリザベーションで生き延びている。

またビック・ママが、百個しかない揚げパンを二百人のインディアンに「古代インディアンの神秘」(Alexie 1998:371) を使って食べさせるために、揚げパンを頭上にかかげ二つに割って、人数分の揚げパンを作り出したことで宴会の参加者から賞賛を浴びる。このユーモアに満ちたビック・ママによる語りの基は、聖書(マタイによる福音書 14)からの引用である(参照, 相原 2002:248)。

このようにアレクシーの描くスポーカンの人々の中では、異なる部族のみではなく、異なる宗教さえも共生しているのだ。リザベーションでカトリッ

ク教会は人々が行き交う十字路に位置しているし、物語にはカトリックの神父と恋に落ちるインディアンも登場する。スポーカン族の宗教とキリスト教との共存はビッグ・ママの次の言葉に集約されている。

「いいかい」ビッグ・ママはいった。「あんたはキリスト教の部分をカバーして、あたしは伝統的なインディアンの部分をカバーする。あたしたちはすばらしいコンビになるよ。」(Alexie 1998:344)

この二人のやり取りからは、現代のインディアンたちは「伝統的宗教」のみを信仰の対象としているわけではないことが理解できるだろう。リザベーションには、伝統的宗教とキリスト教にそれぞれの場所が存在するのだ。つまり『リザベーション・ブルース』では、音楽、人種、部族、宗教が交じり合い現代のインディアンの一部を形作っているのである。

この小説に描かれるリザベーションの中には、相原(2002:242)が指摘しているように「私たちが一般に期待をするようなオーセンティックな、真正なインディアン文化」といわれるものはない。「オーセンティックで真正なインディアン文化」は、社会によって作られてきた固定化されたイメージである。これに反してアレクシーの描くインディアンこそが現代社会を生き抜くステレオタイプに捕われることのない変化し続ける「真のインディアンの姿」なのだ。

3. トリックスターとしてのコヨーテ・スプリングズ

このように考えて来ると『リザベーション・ブルース』に登場するバンド名「コヨーテ・スプリングズ」は特別な意味を帯びてくる。コヨーテはインディアンの世界では特別な力を持つトリックスターとして深く民話と結びついている場合が多い。山口昌男(1974:294-295)はトリックスターを下記のように定義している。

道化＝トリックスターの知性は、一つの現実のみに執着することの不毛さを知らせるはずである。一つの現実に拘泥することを強いるの

が、「首尾一貫性」の行きつくところで あるとすれば、それを拒否するのは、さまざまな「現実」を同時に生き、それらの間を 自由に往還し、世界をして、その隠れた相貌を絶えず顕在化させることによって、より ダイナミックな宇宙論的次元を開発する精神の技術であるともいえよう。

この物語に登場する人物たちはまさに外の世界からあてはめられた「ステレオタイプ」から逸脱することで「さまざまな現実」を同時に生き、変化しながらインディアンとしての自己を築きあげている。

神話の中のコヨーテが時間と空間を自由に往来するように、この小説では過去の出来事が夢という形で今を生きるインディアンの記憶に生き続けている。例えば、コヨーテ・スプリングズを「外の世界」に売り出そうとするのは、キャヴァルリー・レコード会社 (Cavalry Record Company) の最高責任者アームストロング (Armstrong)、その部下フィル・シェリダン (Phil Sheridan)、ジョージ・ライト (George Right) である。彼らは過去におけるインディアンと白人間の戦いで、インディアンの側からすると大きな脅威であった人物たちだ。この3名を中心にした白人は、インディアンたちの記憶の中に悪夢として存在し、現在を生き続ける。

コヨーテ・スプリングズのメンバーの1人であるジュニアの夢では、

...一発の銃声が響き、インディアンの若者が死んで馬から落ちた。若者の馬も撃たれて、倒れる。銃弾が四方八方から飛んできた。ラッパの数がどんどんふえていく。

どこにいやがる？インディアンは叫びながら次々と弾丸を浴びて倒れ、ジュニアだけが残った。

撃ち方やめい！白人の男が大声をあげた。その声はとても近くからきこえ、ジュニアはこれで敵のいる場所がわかったと思った。だが土埃のなかにも、日光のなかにも、何も見当たらない。

銃を捨てろ！白人の男が叫んだ。

どこにいるんだ？ジュニアがきいた。

銃を捨てろ！男がさらに声を荒げていった。そのすさまじい声に、ジュニアは銃を落とし、激痛の走った耳を両手でふさいだ。すると見えない手に、いきなり馬から引きずり降ろされ、地面に叩きつけられ、蹴とばされ、袋叩きにされた。まわりを囲む男たちの、せわしい息づかいがきこえてくる。しかし姿は見えない。

…だれだ？夢のなかで、ジュニアはたずねる。ひとりの大柄な兵士が歩み寄ると手を差し出した。ジュニアはその手につかまって、立ち上がった。ジョージ・ライト将軍だ。ジュニアはライトに目を向け、それから死んだ馬を見た。(Alexie 1998:180)

この後、白い馬に乗ってシェリダン将軍がやって来て、ジュニア・ポトラキンは殺人罪で絞首刑となってしまう。

ビクター、火おこしトマスも、そして部族の異なるフラットヘッド族のチェッカーズも同様の悪夢にうなされる。

おまえらインディアンはいつだってそういう。白人があたしたちにこうした、とか、白人がおれたちにああした、とか。…インディアンはいつもそうだ。シェリダンはチェッカーズの顔に向かって怒鳴った。俺たちが決めた場所からちよろちよろ動きやがって。命令をききやしない。いつまでもさからいやがる。おれはもうおまえらと戦うのはうんざりなんだ。いつになったらあきらめるんだ？(Alexie 1998:292-293)

これらの記憶は、単なる「過去」の出来事ではなく「現在」の一部として登場人物たちの心に留められている。なぜならインディアンである彼らはトリックスターのコヨーテのように現在と過去という時空を越えた領域に生きているからだ。

長岡 (1992:309) は、これらの夢が実体験のように描かれ、夢を見た本人が内容を想起することがなく、殆ど誰とも語らないのは、悪夢を物語化して他の誰かに話せるほど秩序だった記憶としては認識されていないからだと指摘している。しかし、これらの歴史的な記憶は、あまりに深く「語り」を通

してインディアン個人の身の中に入り込んでいるため、わざわざ他の人々と共有する必要性がないと考えることはできないだろうか。それは火おこしトマスの物語が砂のように服に入りこみ、物語は煙のごとく、髪まとわりつき、どんなに石鹸やシャンプーで洗い流そうとしても無駄なように (Alexie 1998:28)。

4. 混沌の中の居場所

「語りによって保たれる記憶」は過去と現在を繋ぐ。インディアンたちがこの語りから自由になることは非常に困難だ。なぜなら過去は現在の彼らの存在を「縛り」、現代社会における彼らの位置を「規定」しているからだ。繰り返し語られる過去の記憶は今を形作り、インディアンの一部となる。火おこしトマスはチェスに語りかける。

おれたちふたりはゴーストダンサーたちが虐殺されたとき、ウーンデッド・ニーにいた。そして、ウーンデッド・ニーで殺された。もちろんそこに住んでいたのはまったく違う部族だ。スポーカン族も、フラットヘッド族もいやしなかった。けど、おれたちはなぜかそこにいた。あらゆるインディアンの一部が雪のなかで血を流したんだ。神の名のもとに、兵士が俺たちを殺したんだ。(Alexie 1998:211)

この火おこしトマスの言葉からは、彼らの中に過去と現在が同時に存在していることがわかるだろう。

しかしインディアンたちは過去の悲惨な記憶から逃れる術を知らないわけではない。記憶としての過去は自己の一部ではあるが、彼らは過去ではなく、未来を見て生きているからだ。これは過去に殺された馬、人への「弔いの歌」が「祝いの歌」へと変わることによって表現されている。

影の馬の歌、殺された馬の歌、悲鳴をあげる馬の歌。弔いの歌は、やがて祝いの歌となる。生きのびた。生きのびたんだ。... ヴァンのなかで、火おこしトマスとチェスとチェッカーズは声をそろえて歌う。

生きている。生きていくんだ。影の馬たちと一緒に歌う。生きていくんだ。(Alexie 1998:377)

物語の最後で、火おこしトマス、チェス、チェッカーズは、スポーカン・リザベーションを出ていくことを決心する。3人は自分たちの世界であるリザベーションを出ることに大きな不安を抱えていたが、実際に境界を越えても悪いことは何も起こらなかった。「後ろで鍵が音を立てて閉まる事もなく、何かの声も聞こえなかった。」(Alexie 1998:376)。それどころか彼らの運転する車の横を影が馬の形となり並走したのだ。インディアンたちは、過去の悲惨な記憶を内在化しつつ、それを昇華し、リザベーションを超えて生き続ける。

5. 現実と虚像の狭間で

キャヴァルリー・レコードのオーディションでの失敗により、コヨーテ・スプリングズは成功への道を閉ざされてしまう。結局、マディソンスクエア・ガーデンでエアロスミスの前座をつとめることはできなかったし、これまで無視されてきた彼らの演奏を本気で聞いてくれる人々も現れなかった(Alexie 1998:262)。皮肉なことに、成功を手にしたのはインディアンに憧れ、スポーカン・リザベーションにやって来た白人のベティとヴェロニカたちであった。ジェリダンとは2人に話しかける。

我がキャヴァルリー・レコードは有望なインディアン・バンドを売り出そうと思っている。知ってのとおり、コヨーテ・スプリングズは自滅した。われわれはもっとちゃんとしたインディアンが必要だと考えている。つまり、君たちのようなインディアンが必要なんだよ。(Alexie 1998:335) (傍点：筆者)

彼は、二人を少し演出し、日焼けサロンで肌を焼かせ、整形で頬骨を少し高くして髪を黒く染めてインディアンを作り上げることができると上司のアームストロングの説得を試みる。なによりインディアンの音楽は高く売れるの

だから。

憧れからリザベーションに出向き、コヨーテ・スプリングズと数回ではあるが舞台を共にした白人の2人が成功し「本物のインディアン・バンド」が成功できなかったのは、今だにインディアンがある一定のステレオタイプのみから理解され、差別的な対応を受けているということを間接的に訴えているように思える。ベティとヴェロニカのCDの歌詞には「鷺、自然との繋がりを、バッファロー」が歌われ、伴奏にはインディアンの太鼓、笛、戦士のトリルという「ありきたりなインディアン・サウンドトラック」が使われている。ベティとヴェロニカから送られてきたテープを聴いた火おこしトマスは「テープの音楽からチェスとチェッカーズを守るために」カセットを床に叩きつけ、踏みつける (Alexie 1998:363-65)。この行為は、白人社会により作られたインディアンのイメージを破壊することで、インディアンを守る象徴的な行動として読み取ることが可能である。

結局、白人の音楽業界では成功できなかったコヨーテ・スプリングズだが、彼らが「歌い、語り続ける権利は誰も奪い去ることはできない。」 (Alexie 1998:363) 歌うこと語り続けることで、その記憶は過去、現在、未来を生きることになる。物語の最後でバンドは解散しメンバーたちはそれぞれの道を歩むことになる。ここからはインディアンたちを一つの型にあてはめる事のできないことがわかるだろう。ビッグ・ママがコヨーテ・スプリングズのメンバーに言い聞かせたように、幸せになれるかどうかは「... あんたたち次第。あんたたちが選んで決めること」 (Alexie 1998:269) なのだ。そこにはDNAのみで定義され、ステレオタイプで一括りにされた「過去という時空」に押し込められたインディアン像はない。この物語のインディアンたちは「食欲かつ積極的に、外界の文化を取り入れては、次々と消化して」 (相原 2002:242) 生きている。この過程でインディアンは「インディアンらしさ」を失うことはない。なぜなら語りを通して伝承される過去の記憶は消え去ることはないのだから。

注

¹ この論文での DNA 関連の記載は *Los Angeles Times*, (August 30, 2005. by Karen Kaplan) を参照のこと。

² チェロキーは 1866 年まで黒人奴隷を保有していたが、奴隷解放の後、奴隷たちを部族の一員として受け入れた。彼（彼女）らは Freedman（フリードマン）と呼ばれる。この登録手続きがいかに正確性に欠けたものであったかは Brendan Koerner の “Blood Feud” in *Wired*, (September, 2005:118–125) を参照にすること。

参考文献

1. 相原優子「極限で見る夢：リザベーションからの視線」西村頼男・喜納育江編著『ネイティブ・アメリカンの文学』ミネルヴァ書房，2002 年，237–260 頁。
2. Alexie, Sherman. *Reservation Blues*. NY: Warner Books, 1995. (日本語訳，シャーマン・アレクシー，金原瑞人訳『リザベーション・ブルース』海外文学コレクション，東京創元社，1998 年。
3. Bird, Gloria. 1995, “The Exaggeration of Despair in Sherman Alexie’s *Reservation Blues*” Retrieved on August 3, 2005 from <http://www.hanksville.org/storytellers/gbird/poems/RezBlues.html>. (原書は *Wicazo Sa Review* 11–2, 1995:47–52) を参照。
4. Kaplan, Karen. Ancestry in a Drop of Blood, *Los Angeles Times*, August 30, 2005 Retrieved on September 27, 2005 from Latimes.com. <http://www.latimes.com/news/printedition/la-sci-indiandna30aug30,0,209616,full.story> 参照)
5. 長岡真吾「夢の記憶，記憶の歌—シャーマン・アレクシー『リザベーション・ブルース』試論」松本昇，松本一裕・行方均編『記憶のポリティクス—アメリカ文学における忘却と想起』南雲フェニックス，2001 年，301–324 頁。
6. 山口昌男「今日のトリックスター論」ポール・ラディン，カール・ケレーニイ，カール・グスタフ・ユング（皆河宗一・高橋英夫・河合隼雄訳）『トリックスター』晶文社，1974 年，279–306 頁。